芭蕉

爰句集

下

秋

鴻海眺望

初秋の海いと面白し一みるを
初秋のたゝみ
美濃や佐渡よ横たをの川
文月や六日もさすがまゝ似
合歓の木は紫もいとゝ平の新
東雲は毋七十余を七夕は秋七月七日をあらはすきす
江万葉は七夕を歌とす
七夕は萩の多和や佐渡の秋
文月なるの秋風雲を江戸白浜紅石のはきを

蓮水

ひたすらして鳥鶏も枝枕をなろう一紫樓を夢寒

たゞ小舟はうかまを繋として

鳥の水上早も藤屋や岩のうへ

七夕やれを城さまる教はまもの

何某はは代皮の徒を光して四國へ移人よおろる

七夕の

名所八絃の内ほう合はは井や絶れん三田川

夕かはやかいまうはを枝八束反

加賀はは面白きるとして

熊坂の山ゆうやの川のあ

水雲山の芋蔓蔓所より迎

魂はうかうも燒場は煙うれ

居壽貞う所はまりはうを

教なうれ牡りもうを

まはやはまをを所おうを作

舊里にかうして童をはまもの

家はうはうれ

一歌うれ

桜よ公賀は蕎麦

きうして雪雲くし出野

蕎出はまをうよ茶はう屋

小鳥はうは桜はうや蟬蝉

寺田はやはうして童の燒はは物を天て

むうんやれ燒のうはきうは

鹿の来て解にいなや起くれ
粧ひは躰 みも いなやおそくれ
きひしさや 形に熟する 蟷螂
蜻蛉や とつきかへし 草のはし
鷺は宗も 小法師に届るいなつま
蛇は蝶にもなりて 秋葉落る也
稲つま耳にとる雲は 紙帳哉
山の端はいなつまも待たる也

言李下

詠 智識の高へ法禅大徳のあとひとつやいなつま
いなつまにさとらぬ人は 貴 きみ
いなつまや法は西に ひかりけり

いなつまや雲はうき行 又 位は
本るさまに髑髏とも はなはだかまへて能そ
まで画くは髑髏さも忘れまかへしとは言をはなれ
なとりとは昔ひとつもなりしんやかの髑髏を描くしてつれ
見うけ也まつわるかなしとはなしにあかまさくらの
いなつまや新にみやるすゝきの穂

髑髏の画 夕風や生花竹も 散りなき
二をんの掉 硯とひかりかゝきいしみち
やうく は清ねかめて

画賛 雲とくさくうく夏虫すこつまや
秋行のうしろもかさ 松の露

首夏の別ふるさとの

今日もまた山人は出ぬ

草庵　乃細しすまやの山の花はさかり

雲ふかゆるさに水清て心ふかくはらるる

書しくれ雨さとに白て降り注き

うしろ新屋に飯のかを焚る時雨代

時雨志ぐれ　飯の煙うすく　杖の風

ひやくとに鄰近　凡苔み

旅しらぬや　雨ひえて　蛍舞ふ

あるじ茶を入るるまよひて

秋すゝしき毎夕毎夕　ゆり苔子

金屋ふる時雨　時雨ちゝ　雨ちゝ

信濃紙　紙屋をかゝえて　出る　折事　庵の柳のちる

けしき

庵掃て出るやてしに　苔柳

雨霧ちる清て　雨霧　雨霧

大さゝ　雨霧　雨霧

傷ひりて　茅　雨霧

しくたかと

僧　うさう　白いく　死かゝる　法　松

和尚　墓　墓　墓　墓　墓　墓　墓　墓　墓　墓

萩さけり人に[illegible]
朝の風[illegible]

[illegible]

[illegible]萩を[illegible]
[illegible]
萩[illegible]一[illegible]

市振にて寝たるに一間隔て若き女の声[illegible]
[illegible]老たる男の声もまじりて物語
するを聞ば越後の国新潟といふ所の遊女なりし伊
勢参宮するとて此関まで男の送りて[illegible]

一家に女も寝たり萩と月

小松といふ所にて
しほらしき名や小松吹く萩すすき

題 小亭雨中妓者
ぬれて行く人もをかしや雨の萩

画賛
白露もこぼさぬ萩のうねりかな

芭蕉去年か庵の[illegible]
風色やしどろに植し庭の萩

浪の間や小貝にまじる萩の塵

東寺を過るとて
荻の穂や頭をつかむ羅生門

深川庵

芭蕉ありて嘸なきを　聞取られ
世もまで　庵一といの　ともしき
翁像や　そのまゝまねをやまひをし
ひと筋くと物事けしやらかくし
むかしのまゝ姉ゆまで　さすみなくし

画賛

ありといひける女かけたる面白せまいとく　白紙[?]
書し付ける

菊の香や蝶はつきまよ葉のうれ

わすれて

門に入る蕎麦にも葉は見えつゝあれ

本蕉嫁は回首ふりて鼓戸は人々に鏡[?]

草の戸をあれや種蔓の唐がらし

青くてもあるべきものを　唐がらし

かくさぬぞ宿は菜汁に　唐がらし

大風のあしたも赤し　唐がらし

夕日や秋といふくの瓢かれ

是上峰

道ばたは木槿をうた啄ま汁ぞ

花槿ありつゝはのかさしられ

八朔や天のましるたちま暦計

高田醫師　細川表庵にて

菊園にいつまでも花ある草は咲く

草いろいろおのおの香みて柄かれ

子稲のまゝや家に入れる　ま　磯海

嵐雪か四国にわたるとき

讃島二百十日も　永ト文成

むつかしや秩父殿さへ相撲取

許六の選

猪角力いつもとよ草相撲

角髪や…出羽は相撲とり

三日月や鈴鹿は夕へつゆけきん

何事も見なしてなるも似たる三日の月

三日月に地はおほろなり蕎麦の花

嵐雪の墓にまうでて

見しやその七日は墓の三日の月

詠むるや江戸にはまれな山の月

仍て住なれし月見の室を家として

杜牧か早行の残夢小夜の中山にいたりて忽驚く

馬に寝て残夢月遠し茶の煙

月はやし梢は雨を持ちなから

明ほのや二十七夜も三日の月

月みあるしに従ふ事無きを以て屋根を葺く郎の人々かなしさのあまりて…みのけなよ…もの…けれは是を入て家積物の患はなしせしとも…

旅の中に…哉　宿の月

更科山は八幡といふ里より西南に横をれて冷しく高くもあらす角々しき岩なとも見えす只哀深き

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

善光寺

月新や四門四方も昔ひとり

悔恵法師大蔵法師

[illegible]

義仲の高名の月惜し

湯尾峠

月よりも惜しきは今やいもの神

月はいま西に初雁もなきつれて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月清し松行はもてふ砂はうつ

[illegible]

月は今夫雁は[illegible]月の海の道

[illegible]

[illegible]

[illegible]

伊吹山

又云ふ[illegible]

[illegible]

月さしぬ四方の海はなれ[illegible]

勝はなや稲[illegible]月を見ふ

[illegible]

月やそれ純の木の日の赤き面

正秀亭初會　月代や縞の木を切る香の風

須磨にて月さし入よ涼み堂

集めけり夜ゝ宮ハいやしき名なれども世に赤のもの

ふるさとの月を東山に住みて侍を見るに西行の

よもやまの話しかたるこゝろ也と先生語り

なるかしかれを

集めけり戸の月やそれきくうらみ婦

石山に詣ずる道なるべく

橋柳の赤みに月の名残かな

明月のうらみひとつ芭蕉哉

芭蕉翁の手紙を拾ひけん巻の月

淀川の手紙を拾ひて

川よりも月や寒かる

東野氏人を淀川に出でて京都に帰る

入月や机の口渇うれ

川ぶねや夜ゝ寒き月の影

月の影に思ひをかけて

月や淀や　弧山にうつる　見ぬ世

月見せよ　あるのあるを月の先

武蔵国赤時仁見寺にて改山去秋先生とあう

[illegible]月や　五十一箇條
名月や池をめぐりて杖もする
根本ちの源宮やとるふ人まして深草を尋ねむ
ちまを変て菊あるふ月見哉
[illegible]人を結むる月見哉
生酒をとくくく月見哉
[illegible]

清水の橋をもとたる橋をはさむ
橋をとをくく一條かもつとかみるかとて
[illegible]月見哉の[illegible]
名月やわほのわさ見なるよ
[illegible]月のあや　茶の山

古寺歌月

名月や[illegible]
名月や四畳半なる月　[illegible]
名月や御[illegible]
名月や二ツ[illegible]
名月や八[illegible]
名月や[illegible]
名月や[illegible]
名月や[illegible]
名月や[illegible]
名月に華[illegible]
[illegible]月[illegible]

義仲庵におゐて

三井寺の門たゝかばや今日の月
菜く数く友をあつめしは月は名
しら雲ちれよし野の月も十六夜
来る代を待ちかねてやけふの月
十六夜もあるゝ風一の名月かな
やまかしと出て待ろよ月の雲
ひとよしや後も萎し月の雲
いさよひやまうま雲にかくれ

望田にて

新麦を年の菜に海は皆の新浪文升しらてる
家麦は此年の蕎麦粉一銭少またに弐百文

古春しりて

名の池なゝて高き松の雲の月
蓋く郎をのこ請待りて
三十日月出しの手は影を捨る嵐
草は葉や月待里はやけ鳥
西行花は紫に派あり女とも草枕に美しく
草深く女の秋行 此きえ 歌よまん
行楽新らしく老庵至りなく
雲揮に洞川しくもあり人のぞみ庵
秋足らす今来しら高き生花見ん
しかをかや庵に旅まよ 此月の雲

たう栗や新蕾の藤のとを遠
鶯啼や為の茶の時 雅あるく

寒人庵牧亭をとゝまして

芋うゑて竹に日あたる秋の雨
機や今ゝ鳴む 蕎麦
枯つゝみ日ゝ小雨の蓮芽
雪あけ方の蓮芽の瓦葉哉
何くゝ小雨々枝に新うゆ
枝海棠雨のゝ蕾ゆる
墨絵ゝ蕾も蕾かゝも蕾哉
しのぶて来城ゝ一枝をかゝて

花女画賛

破れて五寸ゝ坊 竹窓
鶯ゝ蕾の小神 雄うれ

小枝ゝ蕾ゝ蕾ゝ別ゝ

扇ゝ さく 金魚うれ
相の来て扇ゝ鶯ゝ蕾ゝ
蕾ゝ月の今やゝ峰 鶯
蕾ゝ蕾ゝ蕾ゝ蕾ゝ蕾ゝ
梅すゝ見ん柔の来 物や
刈ゝ稲やゝ稲かゝの 野
老の名のゝもゝて 宮十雀
枝の実芋ゝ芋ゝの羽ゝ朝 嵐

月にかゝる雲や走りの露も
ひいき嶋もあき主し松の廉
様や中川杉もひ出る露むく
高瀬の漁火といふ題をとりて
篝火や河瀬の波のよるむせひ
秋さとしたに吹きかふ燃ゆるかれ
吹けや風石は浅間の野分にも
江之竹被霧といへる題にて風の吹きそふ浦をよめる
野をさらしまつる風の吹きかふ
篭手洗をよみ侍る三ッまるの撫子に浅香あり
撫子や岩くゝ人撫子に秋の風にまで
いつくの宮も須まの浦の名ところといひけるを路
風に似たる秋風といひける名を似たる人の名も又
義朝の似たる似たる秋の風
不破の関にて
秋の世や数もさらけも不破の関
無住しらて大根うらし秋の風
一栄庵
一際もうけたその庭あすや秋の風
ゆかくとほつやうて秋の風
藤彩
那須はハ幡宮のほとりにて杉の梢なとしへて数鏡の
さらさき人秋の野の果はせんかた
琵琶殿
石山の石より白し秋の風

桃夭の名をつけて

桃の花はその葉ちらぬうち　秋の風
秋風やいせは墓うり狂すうり

座右の銘　人の短をつくるなかれ　己が長をたのむべからず

物いふ唇さむし　秋の風

青柳のいとより長し春の雨　秋の風

おくのほそ道

西東いかなる国の　秋の風

蘭蕙と称し　秋風の秋の蘭

曲翠亭にて終夜寒

入翁　秋の月　きのふ　こゝろ　起ても月の　七ッ半

張宗長夜　九段　起ても月の　七ッ半

くすゝ　何某の像

車角亭　言

むかしの名を谷中に負て　紫苑塚

秋のよ　おもしろき　秋の月　彫りうれ

おりうき　秋の月　春の月

人ふるさを　哭つゝ

世の中　を指折　けゝ　まのいと

阪東　載　丁　蓮　ひ　ん　実　秋　月

刈　後の　田面の　ほ　秋

こゝろ　こ　段　起ても　月　水

大和の国竹の内にて

紫苑や 蘆邑ふかうそもむ井の奥

菊花の賛　秋を弱みく 嬰もなかうや 菊は家

草庵は　越ふる 菊田の のうなり 水の流

ちやくを付 かもをしきくは花

菖蒲 ふは菊 菊を愛 花の 詩の言葉

かくきたらつ はつ酒のかうをすあて 物なを

ゑなを 物 ゑ 菊 ゑ ゑ ゑ ゑ ゑ

いさゝひのいつ ゑ 鶏 ゑ 球 ゑ

山中温水　山中や 菊はをれし 酒の匂ひ

木因亭　かくれ家 月と菊に 田 ゑ 反

如行亭　痩なるゝ 引 ゑ 菊は 合 ゑ

ふ 家 の ゑ ひしき 味 を ゑ れ

重陽　ゑ 月 ゑ る 乙 ゑ ゑ 一 ゑ ゑ ゑ ゑ ゑ ゑ

菊は戸や 日くれてくまて 菊は酒

見 ゑ は ゑ ゑ ゑ 酒の菊

田 ゑ ゑ ゑ ゑ

ゑ ゑ ゑ 晴 ゑ ゑ ゑ 菊は ゑ

大門 ゑ ゑ ゑ

琴 箱 や 古 物 店 の 宵 戸 の 菊

何 ゑ 水 既 の 亭 ゑ ゑ ゑ ゑ ゑ ゑ ゑ ゑ ゑ ゑ

いとまゝ〜ゆれを
蝶もまま　酔をすゝ菊は熊が
盛水亭にて　鶯もちや菊はまのすゝ石廣庫
八町堀にて　菊は花咲や石垣のいしの間
花鳥らも男の人をいへふ山家集の題ならず
一家もゆきぬ菊は水ゝれ
菊は雲　花鳥にて　ひろくゝそぬらふ
菊は雲　なゝゝゆきぬ仏庫
菊は雲やなゝ八義世の男ふを
義にて　菊は雲ゝ八義の男ふを
ゆきゆきてゆきゆきて日をくゝして

菊よりて寺ゆと雅俗八雪月花
白菊は月ゝ見たてく見る夢もなし
國女の家にて
没後弧寺の法度を和ゝ
法廟の雲を法ゝ雲
未曾は撥うき世の人は土雲ゝ
如水別墅
義居て未は雲はひろゝ
秋風のいくも雲ゝ　栗はいう
斗休庵にて
秋父ゝ親ゝの子は雲や撥みゝん
蓮蘭ゝ稀ゝ稀ゝうゝき　雲はいい
里ふりて稀の雲ゝ家ゝ
ゝつの稀の一ゝ　ゝ稀の雲ゝ

茸狩やあぶなきことに夕時雨

松茸やかぶれた程は松の形

はつ茸やまだ日数へぬ秋の露

松茸やしらぬ木の葉のへばり付

伊勢にて従者山田が家に侍りて

蔦植て竹四五本のあらし哉

中秋の日ハ更級の里姨捨山の月をみて猶哀さの目もはなれずながら長月十三夜になりぬ

木曽の痩もまだなほらぬに後の月

座頭かと人に見られて月見哉

日吉の帰さ

秋もはやはらつく雨に月の形

内宮ハ事をさまりて外宮の遷宮拝み侍りて

たふとさに皆押あひぬ御遷宮

蔦の葉はむかしめきたる紅葉哉

六分六条の人々芭蕉庵をとふらはれてあるじをとなく

義子里偏伴拂りや秋のくれ

このかみの守袋をほどきて母の白髪をがめよ浦島の子の玉手箱汝が眉もやゝ老たりとしばらくなきて

手にとらば消ん涙ぞあつき秋の霜

秋風や桐に動いてつたの霜

見わたせば詠むれば見れば須磨の秋

秋十とせ人をて江戸をさしたつ

留守

種村屋にて

さらしなの源氏に加ちる源の秋

鹿島神前

此松のみきえせし神の秋

小名木川相愛無約

秋よそもく約くや赤々小松川

旅懐

此松に何てしらるる　をて

秋年ゆき潮ゆかなをする人を

義仲の世をうて嬰子のかれ

鎧る秋の月人哭のうて舟

懐古社

風雅をうて義仲敬する人後をて

武義仲を出す時聖さしたる物のて接待の人

死もせぬ接待の主人秋のくれ

毒酒長老ゆ子社戸ゆて新酒ゆ毒をて

何ものもはき果てる　扇うれ

松尾の高ゆ秋のくれ

聖水ゆ強約を出ゆて

鬼おそ秋ゆ約やさひし秋の雲

毒門をの像ゆ

おもひ出ゆ義もさひしき秋の雲

新酒の屋寄ゆ秋の雲

所思

此道や行人なしに秋の雲

人まちやゝ山道かゝる秋の暮

清水ながれ出る所

松風の野もせをうつて秋くれぬ

秋ゝ秋やゝ雨に引ゆくふかの薗

寺月言ひかたらひて迷ふをあはれんかな

蛙の声ときこえてくるゝ秋うゝ

秋ゝ秋の野たのりしやまき恋

秋ゝ秋やゝ雨をひろはゆくる栗のいが

冬

初雪やゝ山きゝ鳴うゝ山ゝ暗ゝ山ゝ暗ゝ山ゝ

せゝ鳴ゝ

山海ゝ雪ゝ鶴ゝ雪ゝ鶴ゝ雪ゝ鶴ゝ

雪ゝ鶴ゝ雪ゝ鶴ゝ雪ゝ鶴ゝ

江戸ゝ雪ゝ江戸ゝ雪ゝ江戸ゝ

蝶人ゝ蝶ゝ蝶ゝ蝶ゝ蝶ゝ蝶ゝ

一尾根ゝ一尾根ゝ一尾根ゝ一尾根ゝ初しぐれ

山雀ゝ山雀ゝ山雀ゝ山雀ゝ山雀ゝ山雀ゝ

時雨ゝ時雨ゝ時雨ゝ時雨ゝ時雨ゝ時雨ゝ

初しぐれ時雨も小雨そぼ降けり
しぐれ雲たなびく山の端に出て
鶏鳴く寺の夕暮れ
人くしぐれ雨を寒くも
世田の山田あり擬の黒木と
宿うつして
うつうつ寒しもしぐれの大井川
今宵人もとしぐれ初しぐれ
新しき世の中早きしぐれ
夫婦雪降年暮れもしぐれて

草庵

作り出せ世をいとはるる
人はうえけ
初しぐれ初の雪
一しぐれ降て小石川
冬庵や月もいとかる虫の声
冬ごもり又ぞ
金屋
鶴酒壺 酒水の磯
たたみたたみ
鶴酒壺
杉しかぶれ屋

千川亭

先旅人ゝ梅さんの香哉
折〳〵に伊吹をみてや冬籠
節まいりかくるゝ神の落葉かな

深川の庵よりに居を移して
窓の戸に業平本は葉かく嵐かな

尾の長川まで文送りけるもひとんは出あり野暮なく
三十里尾張大根のなつかしさ
落葉してぬるみ手桶もなかりけり
味噌ハ依精進してん

霜月はしめ深川の回景にかゝりても
部出て神も旅籠の日数かな

深新涼や池の中ありて深又外
菊節ひきうまつしけむ此新涼
蝿子涼みうらに捨きせまけて
ふり盡せ尾花まかり蝿子涼

文梁亭口切の日
口切に堺の庭そなつかしき
炉ひらきや左官老ゆく鬢の霜
木からしの身ハ竹斎に似たる哉
こからしや竹にかくれてしつまりぬ

舟画賛
凩や頬はれいたむ人の顔

参州鳳来寺
木叢風まし岩吹とかる杖やかれ

参河新城菅沼権左の宅

京にあきて此木からしや冬住居

多度権現にて

宮人よ我名をちらせ落葉川

三尺の山も嵐の木の葉かな

平田明照寺ハ李由の寺なり封捨して住持し侍る 二句

百年の気色を庭の落葉かな

尊かる涙やそめてちる紅葉

道円居士の葬名おくりし久しき御よみ人なりしを

静かに終りて其日ハさまで初冬の一枝の香を

おもかげや一かたりにあはれといへるさまして

その形見ばや枯木の杖の長

熱田に詣 社頭大にやふれ築地もたふれて草むらにかくる

しのぶさへ枯て餅かふやどりかな

其後修覆をとけて

花くもれ枯て哀を見し草の種

三杖を経て再修覆なりて門人具して

いつにと申人も無く侍る

ともかくもならでや雪の枯尾花

十月八日旅中吟

旅に病で夢は枯野をかけ廻る

州ゝ行や松にはさまれる蔦蔓の壁
床かゝりに句ひやつ月しゆらく花
寒菊や小猿のかゝる　向はきさ

吾唐錦香
別墅

數田椙人亭茅屋畫の題を折ひよそく
水仙や白き陳子が友うちを
三江の画とりてもの子二人に桃先桃信に題
竹くらく寄
其白ひ桃にも白しも仙花
菊は後大根のみさらになし
霧降にて小坊主のうや大根引
口よりは去夜しけさ去大根

玄孫子藤扇子にて菜根を喫して
武士は大根こくきる　蘭　うれ
冬かれの磯よら飲見るよとらかれ
冬くもや世に一句ほ　風の音
多く探る梅は　寓見る新鶏ぞ
梅枝にて咲ほえん　保良の庄
おろかしく茶入探まうは人猿
芹摘や寸は倫の田那の初氷

防川亭
枝風ふ付り走路に一句
麦なしゑよきかくれのや角もろ
さそれ其そのよう時く外霜の扇

[illegible]山の釜霧と庫裏[illegible]

[illegible]

病中

[illegible]

[illegible]川大橋成就せし時

有[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

山中[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]川大佛の[illegible]

旅行

[illegible]川大橋かけ[illegible]時

初雪や[illegible]

初雪や[illegible]

初雪や水仙の葉の[illegible]

[illegible]

雪見にかりきて

市人にいて見[illegible]雪其釜

旅人[illegible]

[illegible]

[illegible]

中[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

游水鵜の

[illegible]

竹の賛

[illegible]

小町画賛

[illegible]

寒山画賛

[illegible]

画賛

[illegible]

ふるさとの芭蕉庵をつくりかへて

[illegible]

自画自賛

いくとしきさやの[illegible]の 桂 [illegible]

[illegible]所の茅庵をたづねて訪ひけるに

[illegible]せよ 鋼代の水魚煮て出さん

雑物に[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

芳舎買氷　氷若く饅蘭の間を走うる白雪
すくくと行やるるとよ氷る新法師
龍門くしく抜の氷の面白く
おのもの葉てを掛あるる事うれ
孫ちやや宮よ入日は新きき
鐵人と云四は歌あるて
きみかと二人旅あるたのりよ
乾鮭や　何菓敷々毛唐人
仙化ら父は長云
神のもとれて事濃はすと
陽中ちく新きし四や縄簑
蓋書に載せうなつきたい
蛸　鯛の歯くきも事し魚の粉
苞白く供ひとてふ事きたい
おきくと帆柱きき入れい
事の事や毎歯なる抜の紙衾
ちてこて抜の金もなりけり
鯰を事ちて義して
夜長一つ行月出たる旅あい
宵宮歯に新剃まる小形のおく
双方のむなしの師の巨蛙い
ちりく歯まに新大蛙い

住つゝね　[illegible]のんや　[illegible]巨燈
[illegible]しのひて
雲の[illegible]あてしこ　[illegible]る　大掛
[illegible]
雲を[illegible]て　[illegible]波ひくをおくりけり
[illegible]おくる　火掛
[illegible]
骨　[illegible]や　[illegible]　[illegible]の屋
女[illegible]
[illegible]　[illegible]の　[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

長崎九贊　[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

旅行

十二月廿五日一半亭

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

身を思もうて酒のむひとりぐ
越後新潟にて
酒のよるる夜や寒しきうきの花
有代表の画賛
物思しや袋の中の月
月と名

慶應三丁卯春求版

東都書林　本所石原町
近藤清太郎板

夏目智哲書庫

百人一首智哲